『うつほ物語』の諸本

――主要四系統の位置関係及び性格――

新美哲彦

一　はじめに

近年、『狭衣物語』や『源氏物語』において、「原態（オリジナル）」に近いと判断される一つの本文に本文を固定するのではなく、複数ある諸本（本文）に含まれる複数の論理を読み解こうとする研究が、徐々に行われつつある。[1] 考えてみれば原態（オリジナル）からの遠近＝本文の優劣という価値図式に囚われることはないし、物語の本文は一つでなければならないというのは思い込みに過ぎない。同様の手法に拠る研究は、『うつほ物語』でも当然有効であろう。

ただし、諸本文の発生が鎌倉時代やそれ以前に遡り得る『源氏物語』や、多様な本文を有する『狭衣物語』などとは違い、『うつほ物語』の現存諸本には近世初期からさほど遡らない時点に具体的な共通祖本が想定できる。その共通祖本と現存諸本の関係については、すでに別稿で考察し、「複数存在したであろう諸本のうち、中世における欠脱の多い一伝本が一次共通祖本として残り、さらに一次共通祖本から派生したであろう諸本のうち、異文注記から見て、一次共通祖本から遠ざかる本文を持つ箇所も多いと推測される一伝本が二次共通祖本として残った。そして、その、異文注記を有する二次共通祖本から現存諸本は派生する」[2]ことを明らかにした。

このような現存諸本の特性から、『うつほ物語』の場合、それぞれの本文の論理を読み解くことと、共通祖本から現存諸本への本文派生の道筋をたどり、現存諸本が生成される現場を押さえることが、他の物語以上に、密接に関連すると想像される。

本稿では、前田家本系、木曽本系、[3] 浜田本系、流布本系、と四系統に大別されながら、漠然としか位置づけされてこなかった諸系統の位置関係を定めた後、諸系統の本文の性格や特徴について整理したい。

なお、本稿では写本群を対象としているため、いわゆる「九大本系」と呼ばれる、近世に作成された校本に見られる書き込みについては考察しない。しかし、「九大本系」は、近世における『うつほ物語』享受の一面を知る上で興味深い対象であり、別に

考察を加えたい。

二　主要四系統の位置関係

『うつほ物語』全冊の諸本は、前田家本系、木曽本系、浜田本系、流布本系の四系統に分けられている。前田家本系上位諸本は、二次共通祖本と同字詰であり、二次共通祖本に極めて近い[2]が、では、他系統の前田家本系に対する位置関係はどうなっているのだろうか。

資料一・諸本脱文表（俊蔭～沖つ白波）

※木曽本系の東京大学図書館蔵萩野由之旧蔵本（東）と浜田本系の静嘉堂蔵浜田本（浜）を前田家十三行本と校合し、一〇字以上の脱落箇所を挙げる。

※その異同箇所を、前田家本系の天理大学図書館蔵毘沙門堂旧蔵本（函架番号二二四六）（天）・宮内庁書陵部蔵御所本（函架番号四五九・一六）（御）・無窮会図書館蔵神習文庫蔵本（無）、木曽本系の久曽神蔵関戸家旧蔵本（久）・蓬左文庫蔵瑩珠院本（蓬）、浜田本系の内閣文庫本（内）・静嘉堂文庫蔵紀氏旧蔵本（紀）・宮内庁書陵部蔵猪苗代兼寿本（兼）、流布本系の延宝五年版本（延）・静嘉堂蔵新宮城旧蔵本（新）・宮内庁書陵部蔵大橋長憲本（大）で確認した。

※◆は脱落。○は存在。▲は脱落ではなく位置がずれる。ミはミセケチ。落は落丁箇所。欠は欠巻。補は補入・補写。引用本文の（　）は補入・注記、〔　〕はミセケチ、【　】は論者注。

※数字は前田家本古典文庫の頁・行数。

				前田家本系				木曽本系			浜田本系				流布本系		
	巻名	頁			天	御	無	東	久	蓬	浜	内	紀	兼	延	新	大
1	俊蔭	11	1	◆補（天女くだりまし〳〵てあそび給所也。たはやすくきたれる）	○	補◆	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
2	俊蔭	17	3	そこ〔い〕にもおなじごとの給て、五人つれておくへ入給。そこにもおなじごとの給て、同ごと六人〔つ〕れて入給。	○	○	○	◆	◆	◆	○	○	○	○	○	○	○
3	俊蔭	34	11	とりかつをかみにして	○	○	○	○	○	○	◆	◆	○	◆	○	○	○
4	俊蔭	61	10	て、なにせんにかくは・（する）ぞといへば、あそび	○	○	○	◆	○	○	○	○	○	○	○	○	○
5	俊蔭	83	10	◆補（きむぢがいでくべきにやものもイ）	補◆	補◆	○	○	○	○	○	○	◆	○	◆	◆	◆
6	俊蔭	87	5	◆補（ちぎりふかくば又もまいりきなんイ）	補◆	補◆	○	○	○	○	○	○	◆	○	○	○	○
7	俊蔭	107	10	びは・さうなど～にたるおきなにて（120・1）	○	○	○	落◆	落◆	落◆	○	○	○	○	○	○	○

26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8
吹上・下	吹上・上	祭の使	祭の使	嵯峨の院	嵯峨の院	嵯峨の院	嵯峨の院	嵯峨の院	嵯峨の院	嵯峨の院	嵯峨の院	嵯峨の院	春日詣	春日詣	忠こそ	藤原の君	藤原の君	藤原の君
535	525	437	398	372	360	355	347	342	338	324	314	312	287	265	245	179	170	124
2	5	11	11	8	6	2	9	7	5	6	1	3	1	8	4	7	9	6
かはげにいと（本ノ）ま（ま）ではものせん。いと所せきうちに、	はず、このわたりにもまはものしたまはざりつれば、いぶかり申	とまるべくもあらず。さはぎみちて、	たけと、のひたるをえらびて、かみよりしもまで	げのなに〳〵も、おしきものなくうしなゐ、こゝら	ひんがしのおとゞにきんだちもまいり給へり。きんだちにまいりたり。	かねてよりまうけられたる物・こ・くだものなどすゑなむべき事。	さいの人〳〵にみなきぬ〳〵ぎてかづく	さよふかく我おりてくるさかきばのえだ　やまふかく	の、事などさだめたまふ。ぬのは、かい・むさしよりもてまう	て、まれにみゆるは、いとめでたくきよらにて、とき〳〵	（さて）そのふみどもいと物ふびんなりきと申給	みこきくを、しおりて。こゝに	左大将殿～【桂の段】	さほひめのほのかにそむる桜はよひさしそむるふぢぞうれしき【一三〇番歌】	そこになやみ給ことあり。とぶらひにものせんといひしかば	こきわざかな～ことならまし（204・8）	ものし給を、殿のきんだちのあまたおはしますを、さて	◆（4）
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	◆
◆	◆	○	◆	◆	○	○	○	○	◆	◆	○	○	○	○	○	○	○	◆
◆	◆	○	◆	◆	○	○	○	○	◆	◆	○	○	○	○	○	○	○	◆
○	○	◆	◆	○	◆	◆	◆	○	○	◆	◆	◆	◆	○	○	落◆	○	○
○	○	◆	◆	○	◆	◆	◆	○	○	◆	◆	◆	◆	○	○	落◆	○	○
○	○	◆	◆	○	◆	◆	◆	○	○	◆	◆	◆	◆	○	○	落◆	○	○
◆	◆	○	◆	◆	○	○	○	◆	◆	◆	○	○	◆	▲	◆	○	◆	◆
◆	◆	○	◆	◆	○	○	○	◆	◆	◆	○	○	◆	▲	○	○	◆	◆
◆	◆	○	◆	◆	○	○	○	ミ	◆	◆	○	○	補◆	▲	○	○	◆	◆
◆	◆	○	◆	◆	○	○	○	○	補◆	◆	○	○	◆	▲	○	○	◆	◆
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	◆	○	○	○	▲	○	○	○	◆
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	◆	○	○	○	▲	○	○	○	◆
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	◆	○	○	○	▲	○	○	○	補◆

44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	
沖つ白波	沖つ白波	内侍のかみ	内侍のかみ	内侍のかみ	内侍のかみ	内侍のかみ	内侍のかみ	内侍のかみ	内侍のかみ	内侍のかみ	内侍のかみ	内侍のかみ	内侍のかみ	内侍のかみ	菊の宴	菊の宴	吹上・下	
905	870	859	844	839	835	821	815	800	781	778	778	764	755	727	640	597	561	
6	8	1	1	4	2	2	4	6	2	11	3	10	5	8	11	7	9	
にしきたのすみ、らう中将のかた。	せんじな〔か〕りしさきより	みゆるは、ましていとなむせちなりける。上、御らんずるに	ずやとのた給ふ。うへ、けしう、そこは、こゝろえ	たまふ時〜めでたくて、夏冬【866・11】	大将のきみ、おどろきたまふけしきを	ける。さるは、一日も一条どのにまいりて、御かたにさぶらひし	なかたゞむまにてさぶらはんとて、たゞかのちゝお	てむかへ給ふ。上さぶらひけるを、などか〔る〕めしに	さらにひき所あるてといふ物なんおぼえず侍とそうす。うへ	て、人なをかずしらずいできて、あそぶことかぎり	なり。こたみこそ、ことさだまるべきたびなれとお	仁寿殿女御ひるのまかなひには【衍文】	さがな、とて、はやうとのたまう。まめやかには、いま、たゞ	女のなさけあるが、ものいひかゝりなどするが、かの	みなかへしたてまつりたり	あらたまるらんと思ひ給るなん、けうぞたのもしきとき	をく露も〜雪ふる日（569・4）	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	◆	○	○	○	○	○	
○	○	落	落	落◆	◆	◆	○	○	○	○	◆	◆	◆	○	◆	◆	落◆	
○	○	落	落	落◆	◆	◆	○	○	○	○	◆	◆	◆	○	◆	◆	落◆	
○	○	落	落	落◆	◆	◆	○	○	○	○	◆	◆	◆	○	◆	◆	落◆	
◆	◆	◆	◆	○	○	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	○	◆	○	
◆	◆	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	○	◆	○	
◆	◆	◆	◆	○	○	◆	◆	◆	◆	◆	◆	○	◆	◆	○	◆	○	
◆	◆	◆	◆	○	○	◆	◆	◆	◆	◆	◆	○	◆	◆	○	◆	○	
○	◆	◆	○	○	○	◆	○	○	○	○	◆	◆	◆	○	○	◆	○	
○	◆	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	○	◆	○	
○	◆	◆	○	○	○	◆	○	○	○	○	◆	◆	◆	○	○	◆	○	

前田家本系を除く木曽本系、浜田本系、流布本系の三系統が共有する脱落箇所（資料一・16・28・31・33・38）が複数認められる。この共通脱落箇所が、別稿[2]で述べたごとく、前田家本系上位諸本のちょうど一行分に当たるわけだが、これらの共通脱落箇所によって、木曽本系、浜田本系、流布本系が同じ祖本から派生したと知られる。

流布本系は、脱文表を見ても推察できるように、巻によって本文系統が違う可能性もあり、脱落を補写している箇所もあるので注意が必要である。だが、資料一・12「さほひめ」歌の位置や、資料一・43の脱落を浜田本系と共有する。よって、基本的には、浜田本系と流布本系が同根であり、木曽本系とわかれた後の浜田本系がさらに崩れた本文に、巻により他本からの補写を加えたものが流布本系であると一応考えておく。この流布本系の性格は、三「諸系統本文の性格」で改めて述べたい。

なお、複数の共通脱落箇所以外にも、「春日詣」巻末の「桂の段」が、木曽本系、浜田本系双方に存在しないなどの形態上の一致からも、やはりこの二系統が同根と知られるが、浜田本系や流布本系と違い、木曽本系は資料一・12「さほひめ」歌は正しい位置に入っており、浜田本系の脱落と重ならない脱落も多い。よって「さほひめ」歌が位置を変える以前に木曽本系は、浜田本系・流布本系と分かれると了解される。

ここで、共通脱落箇所以外の、前田家本の一行分とほぼ重なる脱落箇所を見てみたい。

資料二・前田家本の一行とほぼ重なる脱落箇所

※他系統の脱落箇所の前後を前田家本の字詰めで示す。脱落箇所を【　】と傍線で示す。冒頭の数字は資料一の番号。天理本と字詰めが違う場合（34・37）は、天理本の行替箇所を（|）で示す。

(17) こと又六とももの、ふしとねりもこのろくたまふへきぬ【のゝ事なとさためたまふぬのはかいむさしよりもてまう】てきたりしをかへりあるしのろくすまひうと　《浜田本系脱落箇所》

(18) 〳〵しとこにしあとねはやひらてをてにとりもちて【さよふかく我おりてくるさかきはのえたやまふかく】我おりてくるさかきは、神のみまへにかれせさらなん　《浜田本系脱落箇所》

(25) なをこゝにとめしいれてあい給へりひころうちにもまいり給【はすこのわたりにもまはものしたまはさりつれはいふかり申】つるになむ少将はなはたかしこし　《浜田本系脱落箇所》

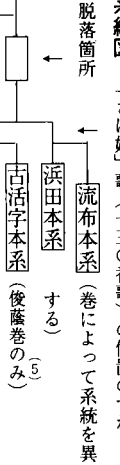
(34) と　（上略）左より四十人のまい人わか」れ【て人なをかすしらすいてきてあそふことかき り】」なくおもしろくあそひせめて（下略）　《浜田本系脱落箇所》

(37) しのゑかのまうけにまいりたる人〳〵くこの御ともに【なかた、むまにてさふらはんとてた、かのち、お】と、のひ」やうけの御くるまに　《浜田本系脱落箇所》

前田家本の一行とほぼ重なる他の脱落箇所を見てみると、すべて、浜田本系の脱落箇所であると知られる。このことから、浜田本系が、木曽本系と分かれた後もしばらくは二次共通祖本の字詰に近い状態を保つこと、よって木曽本系、浜田本系の祖本も二次共通祖本の字詰とほぼ同じであったと理解される。

ここまでの考察によって知られる諸系統の位置関係を系統図に表すと以下のようになる。

資料三・諸本系統図



三　諸系統本文の性格

続いて、諸系統の本文の大まかな性格を見ていきたい。

木曽本系

はじめに、中村忠行[3]が立てて以降、現在まであまり言及されることのない木曽本系の本文を考察する。この木曽本系だが、三条西家旧蔵早稲田大学図書館蔵『源氏物語』表紙裏に見られる『うつほ物語』断簡が木曽本系の本文を有することから、近世前期の三条西家周辺が書写に関わると推測される[6]。また、木曽本系諸本すべてに、左注やルビ、漢字表記が多く、読点が付されるという特徴が見られ、校訂作業を経ていることがうかがえる。

諸本系統は資料三に図示した位置関係にあるので、木曽本系と同一祖本から派生した浜田本系、別系統の前田家本系と比較して木曽本系だけが異文を有する箇所は、字句の改変・誤写と判断できる。そのような箇所のうち特徴的な箇所をいくつか資料四に挙げる。

資料四

※（前田）は前田家本。（木曽）は東京大学蔵萩野本。（浜田）は浜田本。

（1）（前田）つゆかゝるまがきのきくをみな・はものやおもふらん
本ノマヽ　人
（嵯峨の院311・11・一九九番歌）
（木曽）露かゝるまかきの菊を見る人はものやおもふとたれかいふらん
（浜田）露かゝるまかきのきくをみる人はものやおもふらん

（2）（前田）さが野・かすが野、山は　本レ　山なん侍。（吹上・下533・6）
（木曽）嵯峨野春日野山はをくら山・あらし山なん侍
（浜田）さか野かすか野山は　山なん侍

（3）（前田）かく御物がたりし給ふほどに、日ゆふかげに、なをいと、七月十日ばかりのほどに、なをあつささかりなり。（内侍のかみ753・5）
（ママ）（ママ）

（木曽）かく御物かたりし給ほとに・日夕かけは・なをいと七月十日はかりのほとの夕日影猶あつ（ママ）
さかりなり

（浜田）かく御物かたりし給ふほとに日ゆふかけになを
いと七月十日はかりのほとになをあつささかり（ママ）

（1）では、和歌の四・五句が前田家本系、浜田本系で「ものやおもふらん」と、誤写、脱落が想定されるのに対し、木曽本系は「ものやおもふとたれかいふらん」と、和歌にふさわしく字句を加えている。（2）でも、前田家本系・浜田本系は「山は（空白）山なん侍」と脱落が想定されるが、木曽本系は「山はをくら山・あらし山なん侍」と、具体的な山名が補われている。さらに、（3）では前田家本系・浜田本系が、「日ゆふかげに、なをいと」とする箇所を木曽本系ではミセケチにした上で、直後の文に「の夕日影」を付け加え、意味の取りやすい文にしている。以上のごとく、意図的な改変と判断できる字句もあり、読みにくい箇所や読めない箇所でも字句の改変を行っている。

しかし、先述したように、木曽本系は、「さほひめの」歌（一三〇番歌）の位置は古形を遺す。従って、早い段階で浜田本系とわかれた本文を校訂し、二次共通祖本ですでに意味のとりにくかった箇所に、読むための作業（＝校訂）として意図的な改変を施したものが現在の木曽本系と見られる。

比較的早く浜田本系とわかれると推察されるため、浜田本系と一致し前田本系にない異文や、前田本系と一致し浜田本系にない異文などに関しては、二次共通祖本の本文を推測する上で欠かせない系統である上、独自の本文生成を見せており、中世から近世の『うつほ物語』享受を探る上でも見逃せない。

浜田本系

浜田本系諸本は、木曽本系のような校訂は施していないものの、稀に、誤写を通りのいい文にしている箇所が見受けられる。また、異文注記を本文化したと考えられる箇所も見られる。しかし基本的には木曽本系と共通する祖本を比較的忠実に写そうとしているようであり、前田家本系と共通する異文注記も多い。浜田本系独自の特徴は乏しいものの、前田家本系と照らし合わせて、木曽本系の特徴を浮かび上がらせたり、木曽本系と照らし合わせて、前田家本系の特徴を浮かび上がらせたりすることは可能である。

流布本系

流布本系は、諸系統内での位置を言うのに一番困難な本文系統である。例えば、資料一・12のように、「春日詣」巻では「さほひめ」歌が浜田本系と同じく位置を違える。よって流布本系の「春日詣」巻は、浜田本系と近い本文と考えられるにも関わらず、前田家本系と同じく「桂の段」を有する。これは、浜田本系の「春日詣」巻に、前田家本系の「桂の段」を補写した結果と思われる。このように脱落・補写を繰り返しているようであり、錯簡もある。その上、「俊蔭」巻などは明らかに前田家本系であり、他にも前田家本系の巻が混じるようである。単純に系統図での位置を描けない系統であるが、浜田本系に近い巻が多いことか

ら、諸本系統図では、一応、浜田本系の下位におくこととする。

ただし、流布本系には「永禄十一年（一五六八）」の本奥書を持つ平瀬本[7]がある。その奥書年次を信ずるならば、現存諸本に書かれる由来としてはもっとも古いので、二次共通祖本からではなく、一次共通祖本の派生本から混入した巻が存在する可能性も否定できない。その意味でこれからの精査が必要な本文系統と言えよう。

前田家本系

最後に前田家本系について見ていきたい。前田家本系には、他系統との比較における本文上の疑問点と、前田家本系統内での疑問点という、二つの疑問点がある。

まず、本文上の疑問点であるが、資料三・諸本系統図で見たごとく、前田家本系対他系統と、二者を比較することになるので、どちらが二次共通祖本に近い本文かは断定できない。ただし疑問箇所は複数ある。そのうちのいくつかを、資料五で見ていきたい。

資料五

（1）（前田）山のあるじ「あはれ、蓮花のはなぞの、をのがおやのかよひ給所よりか。人の家のこどもとみれどかはぞのより（俊藤16・3）

（木曽）山のあるじあはれ蓮華園・おのか親のかよひ給ふ所よりか・日の本の子と見れと・花園より

（浜田）山のあるしあはれれんくえの花そのをのか親の通ひ給所よりは日の本の子とみれと花そのより

（2）（前田）大将「まさよりも、けふこのみやしろに神馬こたてまつらせんとてなむ侍つ①る・のかたに給はりて、としごろの物がたりもきこえさせてしがな。」②おこなひゞと「くまのへいそぎまかりいるなる。時は、あつげになりぬれば、みちもはげしきに、四五月ばかりになんまかりいづべき。たひらかにまかり帰るものならば、かならずさぶらはん」（春日詣278・4）

（木曽）大将正よりも・けふ此御社に・神馬引奉らんとてなん侍つ・①かのかたに御さいたまはりて・とし比の物語も聞えさせてしかな・熊野へいそきいかなるときにかは・あつけになり②ておほし立さるやおこなひ人みちもはけしきに四五月はかりになんまかりいつへき・たいらかにまかりかへるものならは・かならすとふらはん

（浜田）大将まさよりもけふこのみやしろに神馬正たてまつらせんとてなん侍つ①るのかたに御さいたまはりてとしころの物かたりもきこえさせてしかな②おこなひゝとくるま野へいそきりいかなるときはあつけになりぬれはみちもはけしきに四五月はかりになんまかりいつへきたいらかに

まかり帰ものならはかなすさふらはん

(3) (前田) 中将殿き、わたりはつかにけふぞみつのはまみ(ママ)
見つ、はすぎじすきしふなやどりせん(ママ)(菊の宴638・3・行を変えずに歌が続く)

(木曽) 中将殿
き、わたりはつかにけふそみつのはま
見つ、はすきしふなやとりせん

(浜田) 中将殿
き、わたりはつかにけふそみつの濱みつ、
はすきしふなやとりせん

(4) (前田) あるまじくおぼえしかい(ママ)、きこえそめて、侍らざらんよにも、いとも〳〵いみじういとはしければ(あて宮708・3)

(木曽) 有ましくおほえしかは・聞えそめて侍らさらん世にもおほし出んこそいとも〳〵いみしういとはしけれは

(浜田) あるましくおほえしかはきこえそめて侍らさらんよにもおほしいてんこそいとも〳〵いみしういとはしけれは

(5) (前田) ふた葉よりのべにならはぬ(ママ)をみなへしまがきながらをおひのよはへよ(内侍のかみ769・10・六二〇番歌)

(木曽) ふた葉より野辺にはにほふをみなへしまかきなからをおひのよはへよ

(浜田) 二葉より野へに(ママ)女郎花まかきなからをおひのよはへよ

(1)については笹淵友一がすでに「前田家本及び同系の諸本には「人の家のこともとみれと」とあつて、これを浜田本系の「日本の子とみれと」といふ本文に較べれば、むしろ後者を取るべきか」[8]と述べる。(2)②は先述した木曽本系の語句改変であるが、(2)①「御さい」や、(4)傍線部は、前田家本系の脱落かと思われる。(3)では、前田家本系のみ、改行せずに、本文中に和歌が紛れ込んでおり、衍字も見られる。(5)では、浜田本系が「野へに(空白)」とし、前田家本系と木曽本系が違う本文を有することから、浜田本系と木曽本系の祖本の段階では「野へに(空白)」の本文であったと推測できる。浜田本系には、比較的忠実に親本を書写しようとする姿勢が見られることから、二次共通祖本の段階で、「野へに(空白)」の本文であったのを、前田家本系、木曽本系、それぞれが和歌にふさわしい語句を補った可能性も考えられる。

以上のような本文上の疑問点に加え、前田家本系内での混乱も見られる。

前田家本系上位の諸本のうち、前田家本とすべての巻で本文系統が一致するのは、天理本(帙題簽に「天正頃古寫本」とある)のみである。この前田家本には慶安四年(一六五一)後水尾天皇が下賜したとの箱書(「宇津保物語」慶安四年七月」後水尾天皇所」賜我」黄門利常卿也遂以為家珍焉」正四位下行左近衛権中将兼加賀守菅原朝臣」綱紀再拝頓首誌之」)があるので当時の禁裏

所蔵本（現在所在不明）が親本と考えられる。一方、前田家本の親本があったはずの禁裏が所蔵していた宮内庁書陵部蔵御所本（前田家本とほぼ同時期の書写）は巻によって前田家本とは違う系統の本文を有する。前田家本系上位の本とされる無窮会図書館蔵神習文庫蔵本・広島大学付属図書館蔵柏亭本[9]もまた御所本と同様である。

つまり前田家本系内で二つのグループに分かれてしまうのである。このような、巻によって系統を異にする現象は、他系統においては、いくつかの巻で前田家本系かと判断される流布本系や、単独で流布し、欠脱することの多かったようである「俊蔭」巻を除いてはあまり見られない。

前田家本系上位の前田家本・天理本・御所本はすべて、寄合書きであり、他系統の巻が混じりやすい書写形態である。

そのうち、前田家本・天理本は禁裏本から発する本文のようだが、前田家本と天理本で互いに重ならない異文注記があるので、この二本は直接の関係にはない。

その直接の関係でない前田家本と天理本のすべての巻で本文系統が一致すること、御所本で脱落している資料一・16が前田家本と天理本のほぼ一行にあたること、他の御所本の脱落箇所が浜田本系と重なること、などを考えると、御所本が、いくつかの巻を浜田本系の本文[10]で書写し、そこから無窮会本・柏亭本などが派生したものと推測される。

このように、すべての巻における純粋な前田家本系は前田家本と天理本のみとなる点にも注意が必要であろう。

四　おわりに

従来明確に示されることの無かった主要諸本系統の位置関係だが、異同や脱落により、資料三・諸本系統図のようになると考えられる。

また、すべての巻における前田家本系の純粋な本文は前田家本と天理本の二本のみである上に、木曽本系と浜田本系の祖本が、二次共通祖本や前田家本系上位の本とほぼ同字詰であったことが判明した。このことから、木曽本系と浜田本系で一致し、前田家本系と異なる本文を有する箇所は、二次共通祖本の本文を探る上で重要な箇所となろう。

さらに、主要系統の位置関係が明らかになったことにより、中世から近世にかけての『うつほ物語』の伝流や享受を、より細かくたどることも可能になると思われる。従来の本文研究であれば切り捨てられるであろう、木曽本系の意改箇所なども、木曽本系の本を近世初期の三条西家が書写することを考えると、中近世における古典研究や、『うつほ物語』校訂の先駆的業績としても、中近世における意図的な本文生成の観点からも、興味深く、今後、精密な調査が必要となろう。

このような考察を土台として、諸系統の本文の論理を読み解いていけば、物語というものの豊饒なエネルギーがより鮮明に見えてくるのではないだろうか。

注(1)　『源氏物語』に関しては、伊井春樹、伊藤鉄也、加藤昌嘉などの、『狭衣物語』に関しては片岡利博などの諸論がある。なお、論者にも「物語絵合と源氏の造型――諸本文の差異から――」平安朝文学研究復刊第十号　〇一・一二、「絵合巻の本文世界素描――朱雀院の造型と絵――」『源氏物語の鑑賞と基礎知識　絵合・松風』〇二・一がある。

(2)　拙稿「『うつほ物語』共通祖本の特質」中古文学第六八号　〇一・一一

(3)　木曽本系は中村忠行が「宇津保物語に関する展観書目録」(六〇・一一、『日本文学研究資料叢書　平安朝物語Ⅱ』有精堂　七四・三　再録)で新たに立てた。木曽本系については拙稿「『うつほ物語』の伝流――幽斎本・三条西家断簡から――」(平安朝文学研究復刊第九号　〇〇・一二)参照。

(4)　資料一・8は木曽本系のみ「九郎宮に十郎大殿に十一郎」との文がある。

(5)　古活字本系については、中村忠行「『宇津保物語』古活字本系本文の成立」(天理大学学報第三十三輯　六〇・一二)、前掲拙稿「『うつほ物語』の伝流」参照。

(6)　前掲拙稿「『うつほ物語』の伝流」、拙稿「伝三条西実枝筆『源氏物語』の表紙裏反故――翻刻と紹介・文学資料編――」早稲田大学図書館紀要第47号　〇〇・三

(7)　平瀬本など諸本の具体的書誌については片寄正義「宇津保物語傳本考」(國語國文七一一　三七・二)、笹淵友一「諸本解題」(『校本うつほ物語　俊蔭巻』興文社　四〇・一二)、前掲中村「宇津保物語に関する展観書目録」参照。

(8)　笹淵友一「前田家本宇津保物語解説」『宇津保物語一』古典文庫五七・七

(9)　柏亭本の異同については猪川優子「柏亭本『うつほ物語』(広島大学蔵)の特色〈その一・二・三〉」(古代中世国文学11・15・16九八・四、〇〇・七、〇〇・一二)を参照した。

(10)　大東急記念文庫蔵『禁裡御蔵書目録』に拠って、慶安二～四年(一六四九～一六五一)ごろに『うつほ物語』が禁裏に所蔵されていたことが知られる。この目録には「右官本万治四年正月十五日禁中炎上之時焼亡云々」との記載があり、『うつほ物語』もこのとき(一六六一)に焼亡したかと思われる。この本は、巻名の書かれ方から判断するに浜田本系のようであり、御所本のいくつかの巻に含まれる浜田本系本文は、あるいはこの本から転写されたものかもしれない。

〔付記〕本稿は二〇〇一年五月十二日に行われた中古文学会春季大会における口頭発表を修正して成稿した。席上ご教示を賜った室城秀之氏、石澤一志氏、その他の諸先生方に厚く御礼申し上げる。